

初めてのフリーランとOBラリー

—フリーラン編—

7年 山口 晋二

10月2日

や、と前期の試験も終わり、いよいよ初めてのフリーランの出発の日がやってきた。午後9時部室を出発。部室にはたくさん人が居たがみんな冷たい。かろうじて高野と西口に大國山の駅まで見送らせて目黒線に乗り込む。いざ小川と2人だけになると、じわじわと不安感がオレを襲ってきた。もちろん、コースで夜小川に襲われなにかという不安である。思えば2、3日前、小川はオレのケツの穴をリーチしたとわめいていたのであった。小川のこゝだから本当にヤリかねない。

11時58分上野発。妙高5号は意外にすいていた。乗客が数えるほどしか居ない。1人で何ボックスもとることができたが、そんなバカなこともしていられないので1人で1ボックスとって寝ることにした。

10月3日

5時39分豊野着。結局2時間位しか眠れなかつたが、すがすがしい朝であった。何といても空気が澄んでいる。天気もいい。そんな中で輪行をすませ駅前で写真を撮って、いざ出発。

快適そのものだった。が出発して15分も走ったところか、小川が突然後ろからわめいた。

「おーい。パンクだあ。」

オレはアゴが落ちた。仕方がないからパンク修理につきあい再び出発。なんのなんのいいながら志賀草津道路に入り、10%の坂が続く。やはり睡眠不足のためか、すぐに足がきれ、まいってしまった。休憩しているとすぐ眠たくなる。小川は路肩に乗り上げてはガタンと落ち、それを繰り返している。あれでよくもまあナガミでないことをなあと感心しながらオレはウトウトと走った。

やっとの思いで今日の目的地熊ノ湯ユースに着いた。このユースは何と熊ノ湯ホテルとい、しよになつてゐる。フロントで受付をすませると、オレたちは部屋に荷物を置いてま、先に温泉にはいった。温泉からでて気が付くとゲーム場に足を運んでいた。初日からこんなことでは先が思ひやられると思、たがけ、こゝ楽しい。免許とりたての小川はレーシングカーのゲームをして得意がっている。その後夕食までひと眠りして、夕食後また温泉にはいりそれから寝たのであ、た。

10月4日

非常によく眠れて疲れもとれたようだ。しかし外は雨。心が重い。オレは部屋にサンバイザーを忘れてきてしまったのだ。あれがないと雨の中の走行、とくに下りはシビアである。仕方がないからホテルの売店で500円もだして買った。

やみそうもないので雨の中を出走。しかし思、たほど雨はひどくなく、難なく渋峠に着いた。雨とはいえやはり紅葉は美しい。少し休憩した後、軽井沢のユースをリーチして雨の中を白根山ま

を走った。観光バスが駐車してあるのでもうやら白根山に書いた
らしいかがすど何も見えな。オレは高校の修学旅行で一度来た
ことがある、たから真白のガスのむこうに黄土色の白根山を見るこ
とができた。

「よし。上まで登ろう。」

オレたちは細い道をチャリッコで登っていった。が、少し狭く
と道がこわれていて道ではないところを登らなければならぬ。
こんなはずではなかつた。2年前に来たときはちゃんと頂上まで
道があったのである。しかしオレたちは引き返しはしなかつた。
押しどかっぎでゆくり登っていくと復たから人声が聞こえた。
振り向くとガスの中から2、3の人影が登ってくる。やばい。こ
んなところを見られたら、「バカや、でら。」と言われようである。
オレたちは必死で上がった。

昼食後白根山を背にまた下っていく。11つの間にか雨もあがり
非常に快適で、思ふ間もなく草津に着いた。そこでオレは自分の
着ているおニューのウィンドブレーカーを見てショックを受けた。
何と泥玉模様になっていたのである。畜生。小川め。覚えてる。

草津道路を出て国道146号線にはいる。最初にきちがいみたい
いな上りがあった。オレたちはそこでもうめげてしまった。急な
上りの後はゆるやかな上りが遠々と続く。平坦に見えたがやはり
少し上っているらしい。全然違くないのである。はたして夕方ま
どに軽井沢に着けるのだろうかという不安状頭をよぎる。足がき

れた。昨日の熊ノ端までのときと同じ状態になってしまった。もうこうなるとは休み休み行くしかない。小川が、止まるうとして足をトラウリップからはずした方と逆の方へ倒れて転倒。バーテープに傷がついた。オレは笑った。まだ笑うだけの元気はあった。小川はこれが初こりびである。何としようばい初こりびであるう。思い出すとまたおかしさがこみあげてくる。

さ。さまでずと前方に見えていた浅間山がだんだん近づいてきて、やっとの思いで浅間山の真東のところまでたどりついた。あとは軽井沢まで下るだけ。無性に嬉しくなった。あ、という間に下りおわりノ8号線を東へ走る。あの池、この橋、あの踏切。見覚えのある景色だ。思えばひと月ほど前、ESCAラリーのオリエンテーリングでこのあたりを走りまわったのである。だからまだ記憶に新しい。小川とあの橋がどろのころのと話しながさ走っていくと。

「がんばってエー。」

という声が出た。オレたちはと、さに振り向き。

「おお——。」

といいながら必死で手を振った。オレとその2人の学校帰りの女学生はキャハハと笑っていた。しかしオレたちは非常に嬉しかった。このフリーランでサイクリストとしてそういうふうに声をかけられたのはこれが初めてだったのである。

なんとか暗くなる前にコースに着くことができてホッとした。

このユースは軽井沢友愛山荘というしょ、とかわ、た名前である。風呂に入、て汗を流してか、夕食を食べた。昨日の熊ノ湯ユースはホテルのような感じでミーティングもなかつたが今日はあつた。食堂にみんなが集ま、てきていよいよミーティングが始まる。3:2位の割合で男の方が多し。2人1組にな、ていりんなゲームをやつた。オレは当然女の子と組んだが、小川はや、ぼりホモの気があつらしく野郎と組んでやつている。オレと組んだ女の子は九州のO.Lで、ユースは初めてだやうだ。話してると九州訛がとてもおもしろい。連れがもう1人いてや、ちの方はいかにもO.L風であつたが、彼女はあまりO.Lという感じではなかつた。最後にはほとんどの女の子がエイトマンを踊らされたりして非常に楽しいミーティングであつた。

偶然小川と同じ高校出の人がいて、小川はミーティング後その人と土佐弁で10c a 1な話にふけつていた。オレはよのよこで今度はまた別の大阪の女の子と話していたが、すぐに消燈時刻になつてしまつた。

10月5日

どうやら今日は天気がよさやうだ。ユースの前で九州の二人連れと大阪の女の子ににもはい、てもらひ写真を撮、てか、さ、そつと出発。今日の目的地は麦草ヒュッテだ。今年の予備合宿で先発隊が麦草を登、たか、さ、い、い、さ、う、わ、さ、を、聞、い、て、い、る。まあ、た、い、し、た、こ、と、は、な、い、だ、ら、う。

ゆるやかな坂を下、21くと間もなく佐久市に着いた。佐久市の市役所があ、たのでそこで休憩することにした。非常に立派な市役所だ。建物の裏側は広い公園のようにな、てあり、芝生など手入れがいき届いていてとてもきれいだ。パンを食べて少し休憩した後、小川が市役所の観光課へ芝草ヒュッテの電話番号を調べに建物の中に入っていった。オレも行くとしたが、小川が一人でいいと言、たし、チャリンコもみていた方がいいと思、たので残ることにした。しかし10月だというのに何という暑さなのだろう。太陽が容赦なく照リつけ、じっとしていても汗ばんでくる。オレは太陽を見上げて

「アホか！」

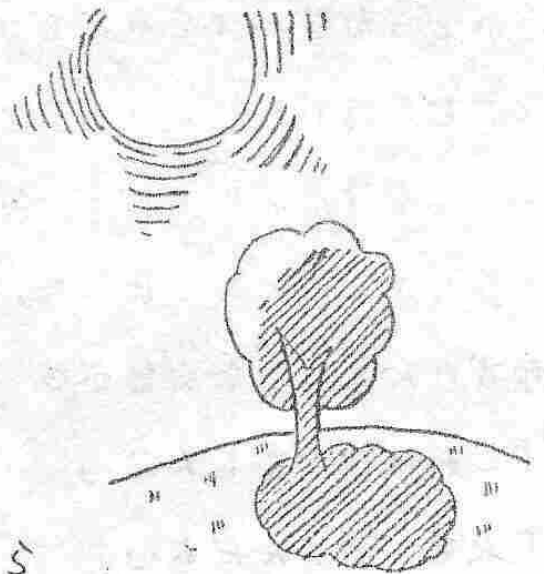
と言、てみたが無視された。

とうとう暑さに耐えきれず、オレは木陰へい、て芝生の上に寝ころが、た。木の枝ごしにコバルト色の空を眺めながらいるんなくださ

ないことを考えていたが、さすがに10月だけあ、て風は涼しく5分もたたぬうちにオレは寒くな、てしま、た。何ということだ。日なたにいと暑くて日陰にいと寒い。

「アホか！」

とオレは風に言、てみたがやはり無視された。それにしても小川は遅い。小川が建物の中に消えてかさも30分近くになる。



あいつのことがさき、と市役所のおっさんといろいろと話しこんでいるに違いない。オレは建物の入口に向かって

「アホか！」

と言ってみた。すると小川が出て来た。あいつはやっぱリアホだ。結局ここに着いて約1時間後にここを出発した。

麦草峠の方へ国道を離れてしまえば食事をとるところはないだろうというので少し早いが昼食にすることにした。食堂らしきところがあったので入って行くと、客は1人もいないらしくとても静かだった。店の人らしいおばさんが奥にいたのでやってみるかどうか尋ねるとやってみると答え。オレたちは宴会場のようなただ、広い座敷にあがらされた。水をもらようと持ってきた。きたないボトルをどこに置こうかと一瞬間、だが、座布団の横の畳の上に置くことにした。きたないボトルといえば、この間、親戚の人とこんな会話があった。

「これは何するもんだ。」

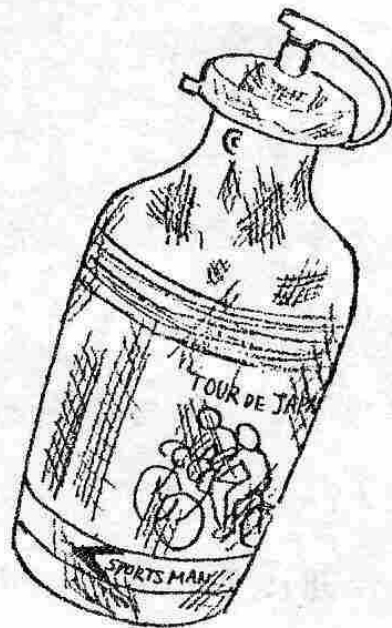
「水を入れるんだよ。」

「その水は何に使うんだ。」

「飲料水だよ。」

「……………」

サイクリングを知らない人から見れば、このボトルは飲料水を入れるにはきたなすぎ



るのである。親子丼を食べながらオレはその一件を小川に話した。勘定を払ったときにオレたちはボトルをさし出して

「すみません。これに水を入れて下さい。」

と頼むと、おぼさんは水を入れながらこの水は何にするのかとオレたちにきいた。オレたちは一瞬顔を見合わせて笑ったが、飲料水だと答えると少し驚いたような顔をしてボトルを洗いだした。しかしそんな簡単に落ちるわけがない。

「内側はきれいですからいいです。」

と言うと、おぼさんもあきらめたらしく、水をいっぱいに入れて手渡してくれた。

いよいよ麦草峠にセリ。天気もいいしからだの調子もいいし言うことなし。国道14号線から離れて登っていく。そんなたいした坂ではない。それに標高100メートル毎に標識があるので気分的にも非常に楽である。標高1100メートルを越えともう人家もみあたらなくなった。それにしても暑い。まるで真夏のようなのである。オレたちは上半身下着1枚で走ることにした。1200、1300とたんたんと登っていく。こんなに登りが苦しく感じられないのは初めてだ。小川はタバコを吸いながら走りそのタバコの火を走りながらどうやって消そうかとまじめに悩んでいる。まったくバカやっているとしか言いようがない。標高1600メートルを過ぎるとさすがに風が少し冷たく感じられ、上に1枚着て走ることにした。

標高1700メートルあたりであるうか。前方から何かがかたりのスピードで走って来る。

「あ、！チャリンコだ。」

2台のチャリンコが下って来る。オレたちは必死で手を振った。1台目が走り去り、そして2台目とすれちがう。何と2台目に乗っていたのは女の人である。なんとなく夫婦という感じだ。た。「オレはあんな結婚がしたいんだ。」

と小川は自分の顔のことをたなにあげて言った。それにしてもこんないい季節に全国のサイクリストは一体何をしているのだろうか。このフリーランでサイクリストに出会ったのはこれが初めてである。などと小川とボヤいているうちに麦草峠に着いてしま、ちゃったりなんかして。

麦草ヒュッテには客は1人もいないようだった。受付で住所を人かを書きながら、小川が

「今日の予約は僕達の他に何人くらいいますか。」

と尋ねると、

「女の方が2人です。」

という返事が返ってきた。オレたちは期待に胸がはずんだ。と、ちょうどその時女の人が2人入って来た。予約の人たちださう。

「……………がビーン。だめだニリヤ。」

顔はけなふまでも愛想も悪い。それも2人を3つて。見事に期待を裏切られてしまった。続けてヒゲをはやした男の人が入っ

て来た。どうやら飛び込みの客らしい。結局客はこの5人だけで、オシたちとヒゲの男の人は屋根裏部屋のような部屋へ連れていかれた。そのヒゲの男の人は大宮の人でなかなかいい人だ。夕食後その人のおごりでワインを飲みかわしながらいろんな話をした。

10月6日

今日もいい天気のようにだ。今日の予定はまた来まってない。とにかく白樺湖まで行こうということになった。やうべワインをおごってくれたヒゲの男の人と写真を撮って出発。

麦草の下りは予備合宿で金井さんがこらんでいる。気を付けなければならぬ。オシはまだ一度もこらでないし、バンクもしてない。これだけがオシの自信である。しかし、下り始めて1分後にはもうそんなことはオシの頭の中にはなかった。急峻の下りは悪天候のためそんなにおもしろくなく、たか、ここは十分下りを満喫したいのである。

2, 3回ゆるやかなカーブを曲がって直線へ。オシはパダルの回転を速め小川を追い抜いた。抜き終わると待っていたのは急カーブであった。オシは左カーブには少し自信があったし対向車も来ていなかったのど、少しふくらんでいけば曲がれるとふんた。しかし甘かったのである。道路の端の方には砂がたまっており、そこに前輪がさしかかるやいなやスリップしてオシは左肩から倒れた。頭を打ち、背中左半分が滑っていく。とうとうやってしまった。オシの初こらびである。ところがそれだけでは終わらな

った。新たな衝撃がオレを襲い、次の瞬間オレは自分のチャリンコにイビがタメをくすり完全に身動きがとれない状態になってしまった。オレは何がどうな、たのかさっぱりわからなかったが、小川の声がしてすべてを悟った。オレがこらんだとこらへ小川がっ、こらで来たのである。オレは身動きがとれないため小川にチャリンコをどけてもらって起き上がった。からだのあちこちが痛かったがそれよりもチャリンコの方が心配だ。ここで走行不能なんてことになってはたまらない。それにオレはまたこのチャリンコのお金を払ってないのである。ラッキーなことに故障はおるかパーテープに傷さえもついでなかった。あんなに敷しくこらんだのに、ラッキーとしが言いようがない。しかしおニューのウィンドブレーカーに穴があいてしまったのはいたかった。ゆっくり下るうということになり、ブレーキの調子を見てからまた下って行く。麦草ヒュッテをたって何と5分後の出来事であった。

迷いながらなんとかゼーナスラインに入り登って行く。坂はそんなにきつくなく、目の前には蓼科山がそびえていた。

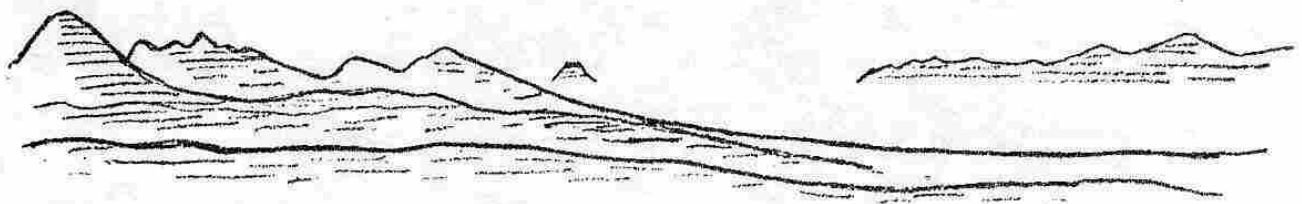
難なく白樺湖に着いた。修学旅行の制服を着た学生たちがうようよしている。昼食にはまだ早い時間だったので20分ほど休憩して霧ヶ峰へ登って行く。霧ヶ峰の富士見台というドライブインで昼食にすることにした。中に入って注文をすると、店のおばさんが、

「今日は天気がよくて富士山が見えるんですよ。」

と言ったので、オレたちは驚いて窓の外を見た。あれが富士山か。八ヶ岳の山すそが懸垂線をなしていてその上に小さな山がちよこんとのっている。日本一の山もここから見ると小さく見えるものだ。

結局今日美ヶ原の山本小屋まで行、ちよおうということにな、て出発。途中諏訪湖が展望できたりして非常に見晴らしがよい。気分爽快であった。和田峠で有料道路を出て中山道(国道142号線)を和田村まで下る。トラックが多くてとても中山道というイメージではなかった。あ、という間に和田村に着いたが問題はこれからだ。和田村の標高は約900メートル。山本小屋は標高2000メートル以上ある。つまりこれから標高差1000メートル以上も登らなければならぬのである。それに今から行く道がどんな道であるのかさえも知らないのであった。とにかく、水を補給してから、山本小屋を目指して和田村をたつことにした。

両側には山が切り立っており、その間を溪谷沿いに登っていく。ゆるやかな登りで道は狭くそれでも舗装はされてあった。少し行くと道端にバスの停留所があった。和田村から山本小屋までバスが通っているらしい。止ま、て時刻表を見てみると1日に数える



ほどしかない。しかしオレたちが山本小屋に着くまでに一台バスに抜かれることが予想された。それにしてもバスが通るとは思えないほど道は細い。どこかのサイクリングロードのような感じである。

地図の上で自分たちのいる位置がはっきりとはつかめなかつたが、三分の1位来たと思われるころからだんだん坂がきつくなってきた。そして半分位まで来るとますますきつくなり10%をかよく越えるような坂が現われた。

もうそろそろバスが登って来るだろうから休憩しようといふ小川が時計を見て言ったのであきらめたことにした。道が狭いので、バスに抜かれるときはいづれにせよ止まらなければならぬのである。パンをかじりながら小川が言った。

「おい、山口。バスに女の子がいっぱい乗っているといいな。今頃の時間に上に上がるってことは今日は山本小屋に泊まるしかないだろう。なっ。」

言える。鋭い指摘だ。さすがのオレもそこまでは考えなかつた。小川君らしい。しかしバスはなかなか姿を現わさない。かたも冷えてきてしまったので仕方がないから出発することにした。

「なんのかんの。」と言いながら登っていくと、4、5人の人夫が工事をしていた。オレたちは自分たちの位置を確かめるために止まって尋ねてみた。するとまた半分位だろうという返事が返ってきた。もう三分の2位来ただろうと思っていたのに、二人をこ

とならきかなければよかった。なにか損をしたような気分である。オレたちは礼を言っで、また相変わらずきつい坂を登っていた。

少しいったところで、上の方の山はだに道が見えた。あんなとこまで登るのがかと思っていると、そこを車が通過するのが見えた。こちへ下、て来る方向である。その車がオレたちとすれちがうまでにどのくらい時間がかかるかであの上に見えている道までどのくらいあそが見当をつけたことができるかと思いが登っていた。しかし車はなかなか来ない。4、5分後や、と姿を現わしオレたちとすれちがった。なぜそんなに時間がかかったのだらう。もしオレたちとすれちがったときぐらいのスピードでずと走、て来たのだとしたら、あそこまで相当あることになる。それとも途中で止まっていたのだらうか。あれこれ考えながさ次のカーブを曲がった。その瞬間解答がでた。何と残酷にもアスファルトはそこまでしかなく、そこから先は未舗装だったのである。いつかはこなるだらうと予想はしていたがやはりショックであった。

ジャリ道に入、てからも相変わらずきつい坂が続く。どちさかさともなく押さうという意見がでてオレたちは押すことにした。それでも30メートルほど押したとこでやっぱり乗らうということになり再び乗、て登、ていく。一度押しをだして気分が楽にな、たせいか、登りが少し楽にな、たよるな気がした。

それからたんと登、ていくと、オレは自分のチャリコンが

異音を発しているのに気づいて小川を止めた。マッドガードのかくしねじがゆるんだのである。後輪をはずしてねじをしめる。そんな時間にかなかさなかつた。水を少し飲んで出発しようとしたとき、後3から車の音がしたので振り返るとバスであった。オレたちはバスのことなんかもうすっかり忘れていた。バスがオレたちのそばを通る。オレたちはバスの中を見た。小川が嬉しそうに大きな声をあげた。

「あ。いる、いる。」

女の子が何人か乗っているのが見えたのである。しかし次の瞬間も、と嬉しいことがおこった。バスの後3の窓から女の子が2人オレたちに手を振っている。

「あれ。あー！」

オレたちは手を振るのも忘れ、彼女たちの方を指さして叫んだ。信じられない。手を振っているのは、なんと軽井沢のユースで会った九州のOL2人なのである。オレは自分の目を疑ったがやっぱり間違いない。オレたちは必死でバスを追いかけた。が、しょせんバスとチャリンコ。それに登り、かなうわけはなかった。みるみるうちに離されてとうとう見えなくなってしまった。

しかし、オレたちはいっぺんで元気になった。山本小屋まで行けば彼女たちに会えるだろう。早く山本小屋に着きたい。その一心でパダルを踏み続けた。

や、との息いで山本小屋についた。山本小屋の前には、彼女た

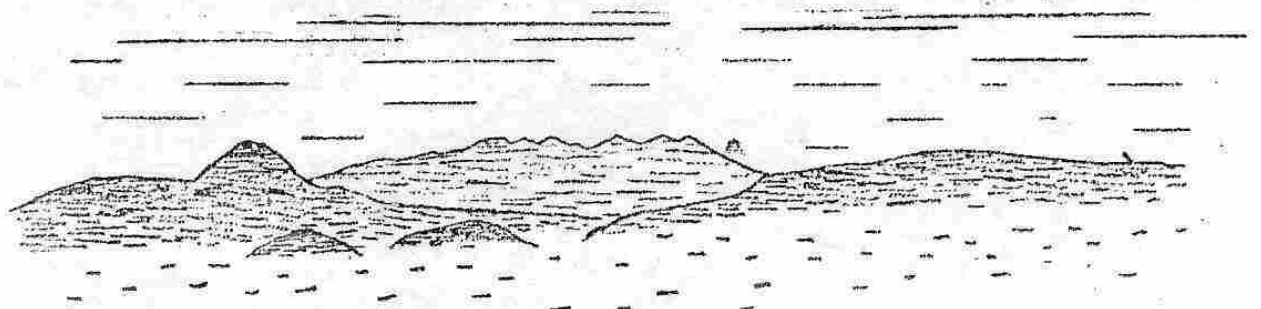
ちを乗せてさっ、きオしたちを抜いてい、たバスが止ま、ていたが、当然そ二にはもう誰もいない。オしたちは山本小屋の中へ入、てい、たがそ二にも彼女たちの姿はなかつた。バスはすいていたのど誰かにきけばわかるかもしれないと思ひ、同じバスに乗、て来たさし、い人に彼女たちのことをきいてみると、ユースの方へ行、たんじやないかということだ。ユースは百曲りという遊歩道を40分ほどい、た三城というところにある。ガビーン！せ、かく会えると思、て一生懸命登、てきたのに。

彼女たちのことで頭がいっぱいで気がつかなか、たが、夕暮れの山本小屋からの眺めは最高であつた。霧ヶ峰の女性的ななだらかな曲線の左の方に藝科山がそびえ、そのおこらにはハケ岳が連な、ている。今朝あのハケ岳をた、たとはとても思えなかつた。

山本小屋は、食事と部屋はよか、たが非常におもしろくなかつた。退屈なのである。8時頃売店の方へ行、てみたが真暗ど誰もいない。仕方がないから部屋に戻、てもう寝ることにした。

10月7日

6時。まず小川が起きてカーテンを開き嬉しうな声でオレを呼んだ。何がそんなにうれしいのだらうと思ひながらまだ半分ね



まけたまま窟のとこへいくと、そこには昨日の夕方よりもと
すばらしい景色があった。八ヶ岳の右側には富士山も見える。オ
レは一発で目がさめた。その景色のすばらしさは言葉ではどうも
い言いかねることにはできない。

今日はまずユースまで行ってチャリンコをまき、1日美ヶ原を
めぐってユースに泊る予定である。軽井沢であった九州のあの
2人に会えるかもしれないという期待を胸に9時頃山本小屋をた
った。

百曲りの道のひどさは予想をはるかに上まわった。登山道によ
うな坂で大きな石がごろごろしてりる。とてもチャリンコに乗っ
て下ることは不可能であった。仕方ないからチャリンコを押し
ながら、いや正確に言うとひきながら下っていった。なんで疲れ
るのだらう。やっぱりチャリンコは乗るものだ。

百曲りがおわると勾配は少しゆるやかになった。しかし岩が多
くてまだ乗れようになかったので押していくと、前から4人の女
の子が歩いて来た。少しの間立ち止まって会話をかわした。その
4人は昨日ユースに泊って今日も連泊するらしい。

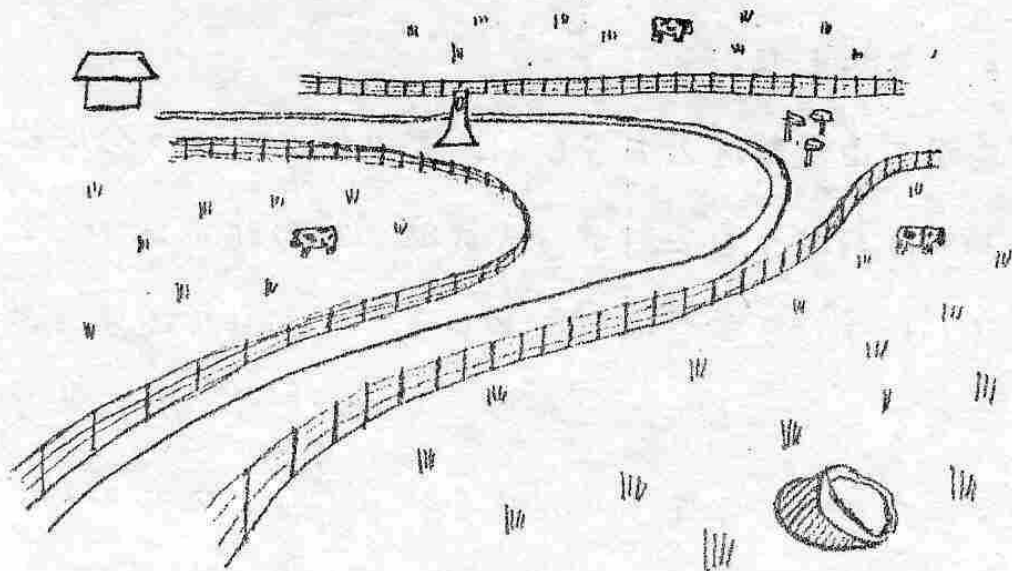
それからすぐにユースに着いた。山本小屋から1時間以上もか
かってしまった。もう10時をすぎている。当然ユースには誰も
いない。九州のあの2人もいなかった。オレたちは裏にチャリン
コを置かせてもらいフロントバックなどを預けてすぐにユースを
出た。また美ヶ原へ登るのであるが、今降りて来た百曲りをまた

登るのどはおもしろくないというので、観光案内図で別の道を探しそっちに行くことにした。

どうやらどにかで道を間違えたらしい。登り始めて10分ほどオレたちはそれに気がついた。が、人が通った形跡があるし上へ上へと登って行けば必ず着くはずだというので、引き返すのはやめてそのまま登ることにした。しかし、それが間違いの始まりだったのである。少し行くともう道は完全になくなってしまう。生い茂っている草木をかきわけかきわけ登らなければならなかった。まるで十二単としているときのようなのである。あるときは岩をよじ登り、あるときは地面をはいつくばって登った。飢えと渴きがオレたちを襲う。もうここまで来たら引き返すことはできない。とにかくオレたちは上へ向かって登り続けた。

苦しくて、そして少し不安な2時間が過ぎた。オレたちははやよの思いで頂上にたどり着くことができたのである。しかし、目の前には牧場が広がっており道はその向こう側にあった。道に出るには牧場を横切らなければならぬ。幸い牛の姿は見当らなかった。オレたちは囲いをくぐって牧場の中を歩き出した。とするとそこに牛のフンが散乱している。それをよけながら少し速足で歩いた。道に出てやっと何か落ち着いたような気分になった。

オレたちは美しの塔の方へ歩き始めた。突然、オレはサンバイザーがなくなっているのに気づき立ち止まった。牧場の中に落ちてきたに違いない。サンバイザーとウィンドブレーカーをいっ



しよに手に持、て歩いてゐたのである。オレは、また圃いをくぐりて牧場の中へ入、ていく気はとても起さなかつた。仕方なく返さぬめてまた歩き出した。

美しいの場にもたれて休んでゐると、変な歌を歌いながら4人の女の子が山本小屋の方から歩いてきた。今朝ユースへ行く途中に出会、た4人である。彼女たちにシャッターをましても、てからちょっとの間彼女たちと立話をした。彼女たちは愛知教育大学の1年で、うち2人は豊橋に住んでゐるといふことだ、た。オレの家は安城で同じ西三河である。こゝろいう旅先では少し家が近いといふだけで何か親しみを感じるものである。オレは愛教大といふ名を聞いただけでなにやら嬉しかつた。

それじゃあまたと言、て彼女たちと別れ、オレたちは再び山本小屋へ行、た。そこでカレーうどんを食べ、熱いミルクを飲んだ。それにしては美ヶ原はどうしてこゝろも女性が多いのだらう。昨日

の山本小屋の泊り客も、20人位居たが男はオしたちの他に2、3人しか居なかった。やはり美々原という名にひかれて、美しくなりたいという女性の欲望がこゝへ来させるのだからか。などと小川と話しながら山本小屋を出た。

もうそろそろユースへ戻ろうということになり、今度はおとなしく百曲りを下すことにした。3時半頃ユースに着き受付をすませた。あの4人はまだ帰ってないらしい。他の客もいないようだった。

小川がユースのおじさんに、昨日は泊り客にサイクリストは居たかどうかを尋ねた。というのは、高橋が昨日あたりこゝに泊ったのではないかという勘がしたのである。高橋もフリーラングニっちの方を走る計画をたてていたからひょっとしたとオシも思った。が小川の勘は鋭かった。昨日は2人のサイクリストが泊ってそのうちの1人が新宿のタカハシという人であるという返事が返って来たのだ。まずそれは高橋に間違いないだろう。

暇つぶしにマンガの本を読んでいるとやがて4人が帰って来た。どうやら今日の泊り客はオしたちと彼女たちの6人だけらしい。しばらくの間彼女たちと廊下で立話をしていたが、立話もなんだからということできいている部屋に入、て話すことにした。高橋のことをきいてみると、髪型背格好などが一致した。チャリングの色はときくと、4人のうちの1人が覚えていてブルーだと答えた。やっぱり高橋に間違いない。それから軽井沢であ、た九州の

の2人につけてもきいてみた。彼女たちは今朝9時40分のバ
スで松本に下ったらしい。9時40分といえばオレたちはユース
を目指して一生懸命百曲りを下っていた。もう1時間、いや30
分早く山本小屋をたてたさう会えただろうに。残念であった。
話もはずんで非常に楽しかった。が、突然

「男の方からお風呂に入って下さい。」

というおじさんの声かして場をしどけさせた。オレたちはしぶ
しぶ風呂に入り、続けて彼女たちが入った。

やがて夕食の支度ができたという呼び声があった。このユース
は食堂がなく、料理を自分の部屋に運んでそこで食べるのだ。あ
ままた小川と顔を合わせて食べるのかと思いつながり料理を運んだ。

夕食が終わるとミーティングかなと思つたがこのユースはミー
ティングはないらしい。仕方なく部屋で小川と明日のことを話し
合つた。明日はフリーランを終え、その足でOBラリーに出席す
るため午後4時半までに山中湖へ行かなければならないのである。
松本から急行で大月まで行き富士急行に乗りかえて富士吉田へ。
しかし、松本から大月までの適当な急行がない。小川と話し合
ついても堂々巡りをするばかり。もう6日間も顔を合わせている
とすぐ口論になつてしまふ。結局少し遅れても仕方ないという
結論に達した。

それにしても女の子たちの部屋から聞こえてくる声が気になる
しょうがない。どうやら彼女たちも明日の計画をたてているよ

うた。小川が彼女たちとミーティングをしようと言いだした。言
いだしっぱが誘えばいいのに、結局ジャンケンで誘い役を決める
ことになった。何となくオレは負けそうな気がした。ジャンケン
というものは負けそうとか負けるといやだなあとか思うとたいて
い負けてしまうものである。やっぱり負けた。

かくして楽しいミーティングが始まった。オレは、豊橋がどう
のこうの刈谷がどうのこうのと local な話をもちだし、小川
をのけ者にして楽しんだ。しかし時間がたつのは早いもので、気が
つくと消燈時刻はとくにすぎている。もう寝ようということに
なり、小川と相談して2人ずつ分けきれぬ3人で仲よく寝たの
であった。というのはまあ、かなうりで、実は小川と2人きり
でまた夜を共にしてしまったのであった。

10月8日

朝食を終えて食器を洗おうと流しのところへ行くと、彼女たち
がもう2ヶ所の流しを両方とも占領していた。オレたちは食器を
置いて少し待たされたが全然譲ろうとしない。小川は先に顔を洗
おうとさっさと行ってしまった。オレは考えた。もしここで食器
を置いて立ち去ると、彼女たちに洗ってくれと言っているよう
なものである。といて彼女たちはオレたちが後で待っている
のに少しも譲ろうとせず、わざと知らん顔をしているようにさえ
思われた。はたして洗ってやると言っているのだろうか。もしと
うだとすると.....。考えたあげく、オレも顔を洗いたいく

ことにした。顔を洗って帰って来たときに、もし彼女たちが洗ってくれていればそれはそれでいいし、洗ってくれてなかったら食器は自分たちで洗えばいい。そしてそのときは彼女たちが最低な人であることがわかったのである。

小川と並んで顔を洗った。洗面所の窓からオレたちのチャリンクが見える。今日はどうやらあまりいい天気ではなさそうだ。空はどんよりとくもっている。

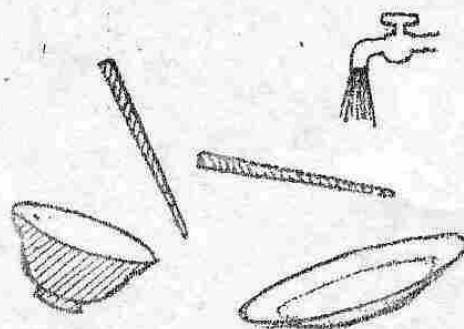
顔を洗い終わりに流しのところへ帰ると、やっぱり彼女たちはオレたちの食器も洗ってくれていた。小川は真面目に驚いて「あれっ!？」

と声を上げた。

オレはしどろしどろしく

「あれっ!」

と声を上げた。



彼女たちは少しづつと静かに黙々とオレたちの食器を洗い続けている。オレは非常に嬉しかった。しかしそれにしては小川はそんなに鈍感なわけでもない。とて人間類とは思えない。

9時前に彼女たちといっしょにユースを出た。彼女たちは9時40分のバスで松本へ下るのである。オレたちは11時36分松本発のアルプス3号に乗る予定だ。下りでバスといっしょになると危ないからということでオレたちは9時30分に出発することにした。それまで彼女たちと写真を撮ったりしながら時間をつぶ

した。松本駅でまた会おうと言、オしたちは9時30分まで、かりに出発した。

松本駅は観光客で割合に込んでいた。駅前もにぎやかである。オしたちは駅の横の方の人の通行のじゃまにならないところで輪行を始めた。今にも雨が降って来そうである。輪行が終わった頃に彼女たちが現われた。しかし、オしたちが輪行袋をかついで駅の中へ入、ていき、切符を買っていきると彼女たちの姿は見えなくなった。どへへ行、てしまったのだらうと思ったがまあいいやという事になり、オしたちは手回り品切符のことを考えることとした。改札口を見ると年輩のこわそうなおっさんが改札をや、てい、る。やっぱり買わなければだめだらうということ、オレはどこで買、たらいいのかをききに切符売場の窓口に行、た。帰、て来ると今度は小川の姿が見えな、い。まわりを見回すと少し離れたところ、で小川は誰かと話、している。誰だらうと思、いなが、らかけよると、何と小川と話、したの、は、軽井沢で会、た。そして美ヶ原ですれちが、たあの九州の2人であ、った。こんなこと、てあるだらうか。オレはとて、も信じられな、かった。

人ごみの中で彼女たちと少し話、した、がすぐに制限時間い、っぱいとなり、オしたちは別れを告、げて改札を通、た。ホームに降り、て電車を待ちなが、らオレは、これで初めてのフリーランにピリオドがうたれるんだと感、じ、しば、らくの間感慨にふ、け、てい、た。やが、て、電車がホームに入、て来、てオしたちが乗り込、もうとす

ると、九州のあの2人がやってきました。見送りに来てくれたのである。発車までの数分間、窓を開けて彼女たちと話した。ちゃんとして4年間で卒業するようになると痛いところをうつかれたりしたが笑顔で答えた。初めてお互いに名まえを教え、そして最後の別れを告げた。発車のベルが鳴ってドアがしまり動き出す。彼女たちが小さくなるまでオレたちは窓から顔を出して必死で手を振った。

電車はぐんぐんスピードを上げて松本から遠ざかる。これでオレたちのフリーランが終わったわけである。が、オレは何か忘れ物をしてきたような変な気分がしてしよがない。小川にきくと小川もや、ぽりそうだとさう。やはりあの4人とあやふやな別れ方をしてしまったせいであらうかなどと考えながら、さ、ま松本の駅で買ったアンパンをかじりながらマンガの本を読み続けるのである。

後でわかったことだが、6日には、高橋はオレたちより1時間ほど早く霧ヶ峰を通っており、その夜オレたちが山本小屋に泊まっているとき高橋は目と鼻の先にあるユースで九州のあの2人と知り合い、2人から、軽井沢と山本小屋への途中でオレたちに会ったことを聞いていたのである。そして7日、オレたちが山本小屋でカレーうどんを食べているとき高橋はすぐ近くをうろついていて、翌8日、オレたちが松本駅であの2人に会っているとき高橋は同じ松本の街でそばを食べていたのである。しかしオレたちは、そんなことは知る由もなかったのである。

以下〇Ｂラリ一編は、一部の登場人物の要望により全登場人物の名前を伏せてある。あしからず。

— 〇Ｂラリ一編 —

アルプス号はかなり込んでいた。甲府あたりでさらに込み具合がひどくなり、からだの不自由そうな老人が乗、て来たのでオレたちは席を譲ることにした。窓の外はとうとう雨が降、てきたようだ。心が重い。

大月で富士急行に乗りかえ、3時40分頃富士吉田についた。集合は4時半だから間にあわないうらう。とにかく輪行をしてしまおうということになり、霧のような細かい雨が降、ているのを眺めてはやまなにかをあとと思いながら4時すぎに輪行を終えて、オレが宿に電話をかけた。東工大サイクリング部の関係の者と呼んでくれと言、てから相当特たされた。たぶん知らないうら〇Ｂの人がぞろぞろうらと思、い、なんて言おうかと考、えていると、突然「もしもし。」

と聞、てきた。

「あのお。1年のＹですけど。」

と言、いかけると

「あう、Ｙか。」

という声か返、てきた。

「なんだ、Hか。かくかくしかじか。」

電話にでたのは1年のHであ、った。オレは遅れることを話した

が、まだあまり集ま、てないというこゝだ。た。

オレたちは霧雨の中を出発した。予備々々ランで走、たので山中湖までの道はわが、ている。それにしてもや、ぱり雨の中の走行にはサンバイザーがほしい。

『O君、ボクのあのサンバイザーどうしたでしょうね。ほふ、熊ノ湯で500円もだして買って美ヶ原の牧場に落としてきたあのサンバイザーですよ。』

オレたちは雨の中を走り続けた。予備々々ランでは山中湖まで非常に軽快に走、た覚えがあるが、今日は雨のせいか全然進まない。5時すぎにや、と山中湖畔にたどり着き、集合場所のなんとか富士荘という宿を一生懸命探したがなかなかわからず、結局着いたのは5時半であ、た。着くとHと同じく1年のSがむかえに出てくれた。HもSもオレたちと同様フリーランから直接来たのである。

と、ここで、このOBラリーには現役はオレたち4人の他に誰が来るのだろうか。もう集合時刻を1時間も過ぎてい、るのに、現役はオレたち4人だけである。思えばひと月ほど前、部会でOBラリーの出席者を募、ったとき手をあげたのはESCAラリーに出席したオレたち4人だけであ、た。しかし、2、3年が1人も来ないというこゝはないだ、ろう。そんなことを考えながらチャリンコから荷物はずしてい、ると、F氏がチャリンコに乗、て登場した。

F氏に尋ねると現役はこの5人だけだ、そうた。

部屋に行、て着がえてからうろろしてると、OBの人が続
続と集ま、て来た。当然のことだが見たことのない人ばかりであ
る。しかし、かんじんの幹事であるH氏がなかなか姿を現わさな
い。やがて夕食の準備ができたから食べてくれと宿の人に言われ
たが、幹事が来ないことにほ始まらな。早くメシにありつきた
いと思、ているとや、とH氏が登場し夕食とな、た。

夕食が終わると、境のふすまをあけて2つの部屋をつなぎ、そこ
にテーブルを並べてそれを囲むようにみんなが座、た。そして上
の方から自己紹介をし、それが終わるといろんな会話がテーブル
の上を飛びか、った。

やがて、酒を買、て来、という声がOBの方から飛び出し、オ
シ、た。現役が立ち上がると、た、腹のOBの人からポンポンと金
が出てあ、という間に1万3千円集ま、た。いよいよ酒を飲んで
春歌を歌、えるというのでOさんがは嬉しさをかくしきれない。

ジョニ赤とリザーブと現役用に角ビンと、それにコーラとたく
さんつまみを買、て、や、との思、いで1万3千円を全部使、て帰
ると、OBの人が、

「全部使、ちゃ、たのか。それじゃあ現役にもちゃんと宿代を払
、てもらわにや、いかん存。」

と言われた。しま、た。そ、うい、うことだ、たのか。それ存、じ、
全部使、おうとわざわざ苦勞することはな、か、たのである。

酒もはい、て雰囲気も盛り上、が、て来たとい、う、初代のK氏が

オールドを1本手に持、て現われた。K氏に1曲歌、てもらおう
ということにな、てK氏は歌いだした。と、るが歌詩を忘れてし
ま、たさしくすぐにつ、かえてしま、た。すると、オシのとなり
に座、ていたH₀氏がK氏にむか、て

「あーよか、た、よか、た。どうもごくろうさまでした。」

と言、た。オシはあかしが、た。これが元祖の「あーよか、た、
よか、た。」なのかと思、いなが、らも、わがサイクリング部の昔から
かわ、ていないカラーというが券田長のようなものを、ま、り
感じと、た。そしてこれが東工大サイクリング部のた、と思、た。

それから次々とOBの方から歌が飛び出し、ワ代目のH₀氏とH₁
氏がピンクレディを踊、たりした。それに続いて待、てましたと
ばかりにオシたち現役がESCAラリーで学、んできた春歌を歌、い
出した。OBの人たちはあ、けにとされて、いたようだ。Oとオシ
はフリーラン中、軽井沢のユースで覚、えてきたエイトマンの踊、りを
初披露した。

いっしか時は過ぎ、12時をまわ、ていた。記念撮映をしよう
ということになりみんなが立ち上がったとき、オシは少し驚、いた。
今まで気がつか、なかつたが、OBの人は2人、な背が高い。オシな
んかは見上げるような人ばかりである。

写真をと、てからおひらきになり、部屋に布団を敷きつめた。
布団にもぐりこんでから眠、るまでの間、となりでHとOが、セン
ベリがどうの、この、1日2回がどうの、この、と相変わらずバカな

話をしている。フリーランでもう何日もやってないから欲求不満のかたまり4E11に呑まれているのだ。

10月9日

目がさめて頭の上に手を伸ばし腕時計を見るともう7時だった。7時にしては暗いなあと感じながらカーテンを少し開いて外を覗いてみると案の定雨だ。蒼生、また雨の中を走るのがと思、ているうちにOBの人がポツポツ起き始め、Sが起きF氏が起きOが起きて、そしてHも……まだ眠っている。

「おい、H、起きた!」

「うゝゝゝん。セシ△リゝゝゝん。」

朝食後H氏が金を集めた。現役は1600円、OBは2000円ということだった。食って飲んでせわいで泊ってた、た1600円。こんなとこ他にある?

雨は全然たまったことなく、ガヤガヤと宿を出てレンタサイクルをやっているところへ行ってきた。OBの人がチャリンコを借りるのである。レンタサイクルは非常に整備が悪く、OBの人がちょっと修理しようとSから工具を借りた。そのとき、Sの工具入れにOBのN氏のネームが入っているのをN氏に見つけたのである。いいいいSは部屋にこそるが、ていた「ジャージ」工具入れを作ったのだ。それがN氏のものだったのである。悪い事はできないものだ。

みんなで山中湖を1周した。今日は日曜日明日は祝日あって

道路は割合に込んでいた。つ、ぱりおにいせんがっつるんでにぎやかに走、ている。

1周した後、食堂の2階の座敷に上がり、4人それぞれビールとかコーヒーとか紅茶を飲んでバンザイをさっしと解散となった。

オレたち現役5人は、富士吉田から乗、たんじゃ座れないうたうというので河口湖駅まで走ることにした。雨はもうすっかりあが、て晴れ間も見えているが、富士山は全くその姿をかくしている。渋滞している車の列の横を走、て河口湖駅についた。輪行をすませ切符を買、てから駅前の食堂で昼食をとり、14時34分発の新宿行きの急行に乗り込んだ。

部室に帰、たらマーシヤンをやろうと、F氏、H、Sとオレの4人で話がついていた。Oはマーシヤンが得意なのである。みんなそれぞれ闘志をみなぎらせて勝負満々でいる。オレだ、て負けてはいられない。もう1週間以上もや、てないから早くパイを握りたくて仕方ない。絶対負けるもんか。

5時半頃大岡山に着き、更科で4人な大カツを食べた。もちろん勝つための縁起かつぎである。誰かは負けるのに、誰も負けたことな人が全く頭はない。おろかなものである。

大カツを食べた、腹になつた4人は、もうすっかり日も暮れて暗くなつた中を学校の正門の中へと消えてい、たとせ。その後4人がどうな、たかは誰も知らないということである。 完